

連作詩篇 魔の満月・第三部

紙田彰

河図洛書

低く垂れた倉庫のゆくりなくも潢潮の進しり 月下の海面すれすれ
に増殖してゆく二重三重の扉 まるで真夜中の河沿いに闇浮提の空
言が閉じられてゆく ひとがた狼の凍りつく牙の暗示 おお狡猾な
る幻惑の逆しま だが前兆だとか予告だとかの幸福な烙印は落とさ
れていない 七宝陶器に封入されている書物のメモリアル 葛紋様
の暗箱に映る宇宙の空腹 それらの蓋付きの円筒に書物を蓄むラベ
ルが貼られている 視神経の傷ついた細胞のひとつひとつにもまた
だがそのような博物学的な書棚の道筋にかつてないほどの索引が
彩色豊かに蔵されてゆく 洋服筆筒を入口にした玩具の王国 天上
圏に棲む魔の使徒ども おお穴と穴 おおそれほどの行文 翻って
みれば家畜小舎を湿らせる脂 五芒星呪の小道具をそもそもの発祥
にしながらゆけども弾条の微かな波形 密偵の暗躍する古着屋の通

りを抜けて一軒の書肆を訪れる。枯れ葉を伴う渦巻がけばけばしいボスターを破棄すると木目が神秘主義的な模様になって現われる。少女が図書目録を閲覧する。ウィンクしながら聖典アベスタの所在を確める。莞爾として応答する異様に背丈のある若主人のかたわらでこれも背の高い美貌の細君が鏡を覗いている。石化した鏡の世界しなやかに燃える火災現場の夜よ。墓場のせせらぎとは運河の名残りである。青白い数百もの燭光を照明にして廃墟の伽藍がぼつと浮かぶ。闇に吸われゆく鍵の銀流しと地下室への階段。ドッベルトゲンガーの徨う粗末な街路が拡がる。その際で眩暈に充ちながら硬質の滑らかな表面に狼奇・錬金の淡い釉薬をたぶらかせて淫奔たる陶士の羅列が朽腐している。漆喰を好んで遣い上がる架空植物の繁雑さは沈静などという俄仕立ての廻廊とは異なり画布に塗られた謎破図とともに無数の蛇を受胎している。まさしく海底住居の前庭にあらゆる顔のままただ一条の白線のたゆたひ。海胆から発する分泌海上の飛沫に埋もれながら渦紋をなす怪鳥の群。靡爛をつづける生体の波間に死と誕生の溶け合った香料が供えられる。白百合と黒薔薇の遺愛に包まれた裸身の女神。おおその祝福すべき刻限よ。造物主

の首が剣ぶ 水底の葱や大蒜から交響楽が洩れる 書物の角はまだ
とれない 林立する朽木はなだらかに躡居されゆく真砂に均合いへ
たへたと堆積する この執拗な調整は脱諷の劈開面にみられる汎神
論風土であるのか 諸子の青黒い呼吸器に見たててこれもまた衍文
に過ぎない 寸足らずの異質な人物は消去可能だ 鏡によって構成
される宇宙のとばぐちに朝月夜の刺青が美しい 秋は回覧板とと
もに訪れる 切り立つ降起に曇ざされた淡水湖の岸辺で水平に幹を
伸ばした灌木の茂みが重厚な濃気を漂わせている 黄色く反吐あげ
た西の空一面に棘を撒きながら白鳥が飛んでゆく 狭い間道沿いに
清澄な湖を巡りゆけば銀色の腹を月光に鑿してびちびちと魚の戯れ
る涵養の水域が拡がっている そこで年代もののコニャックを傾け
よう ビール壺を叩き割ろう 足首の形をした灰皿は不義密通のあ
る種の薬学理論によって捏ねられている たんびとの記憶をも退け
る警句・冗談のうちに恋人を求めて入水した少女の惨い伝承が残さ
れる モニュメントとは達筆な案内状だ 青銅の人魚像は疾うに孕
んでいたのだから それゆえ茫漠とした悠久ではなく俄然明瞭なる
輪郭を現わし古代の景観を圧迫している 氷河期の吃水線は好色な

分類表であるにしてもソロモン王の壙にはたして夢の材質は詰まっているのだろうか 机上の頭骸骨には一切の通信機器が組み込まれその楕円形の帽子に太白星の軌道が印されている まるで前世紀の巨大な建築物を詰め込んだ羊皮紙の伝説のように 目配する数百のフランス人形のコレクションはさておき花柄模様の大陸移動の痕跡が鐘部屋の円天井に浮かぶ 賞味すべき巴且杏に宿る世界聖靈よ 学究猫の首には鈴が肝要だ 判別できぬほどの惨めな打掃を与えよ 強化硝子を滋養にして育つ茸よ 見事な毛並を逆撫でし吸い殻のよりに加筆せよ 瓦礫の割れ目ごとに刻されたものこそ理法を越えた暗号 アマルガムの突飛な夜 火の球からこぼれおちた地球 振子に装備された殺意と兇器よ 海底に遺された幾何学的な通廊が透明な大理石を皮切りに失われた王国を悼んでいる 咽喉仏は呪縛の突端である そこには船具などと等しく粘膜を防護し毒物を吸い上げる乳白の液体が塗布されている だが牡蠣の殻に刻まれている象形文字はその近傍独特の食肉海藻の所在を秘している 氷点下の海流のうちに熟す果実は黄金の唾液をしたたらせる それゆえ一層濃度のある塩水が湧き出るのだ 塩分に限らず精斑のあるものの浮游

天驚絨のように横たわる大陸棚は文明の遺難現場である 古代都市を戴く大河 赤土に塗れて出生の源へと馳せてゆくのか おお地図の鼻孔よ 壘の中に突き立つ首よ 鞭毛の一面に植わる胃壁の海岸から一海里離れるとそれらの亀裂を隠匿している大陸棚の底から分泌腺のすさまじい破裂音が轟く 街学的な大陸を頭脳のうちに建立せしめて出生の源へ翔せ抜けてゆこうとする人非人・ひとでなし・ひとがたの夜空は果たして満月の奇怪な実験に展かれるであろうか その累々たる歴史的な土壌形成とは塩分結晶のなんという建造物 また山脈と海とを分かつ稜羅錦繡のなんという母胎 だがその裂目に厩大な空洞を造り数億に及ぶ痛点の網羅に浸蝕してゆく頭足類 おお眩暈と嘔吐の灼けつくような紺碧の天空に石炭袋のあの滲みが続鎖しながら訪れる びかびかした液の中で硬化する腔腸類 寶石箱をひっくり返しての乱痴気騒ぎ 海底住居の中樞にはいづれも光彩を除外した伴狂の乱舞が施術されている 紙片に紙片を幾重にも挿入してゆく おおひとときわ雄大に鑑え立つ古代文字の精製塩 骨盤は疾うに神々に逼迫している 絡み合って海溝を迷路に化する屈折率と半植物の図解のはころび 視力検査表に貼りつく獣神は外套

の背後に不吉な命令書を縫いつける それというのも屹立すべき火山帯がメビウス環のようにあまりに永却の饒舌に拘泥しているからではなくともその種の起源に関与する信仰と法制化がドームの中の酸素消費の度合いを三拝九拝にしたからである したがって石灰をその素とする海中はいまや雪崩である

見 夢 録

マミ夢メモ 魔行の曼陀羅の投影図法の歴史の綱よ 記録表の数字が手術台の極彩色のたおやかな光の女どもに永遠の四捨五入を迫られている だが統計学は事件簿に等しく転変の董色から零へと垂れるであろうか 親族の夜は古代から不倫の車輪であり劣悪なる壺の恋棒である 父の帰る頃の王宮は肥満体の花どもによって性器がしなやかな鞭である 数台の自動車に分乗してパーティの証契隠滅を画策すべく銃火器を用いて深夜を警備している灯火を殺害する おおその背にマッターホルンのように聳え立つジャックナイフよ 曲

芸人の肘には殺人事件の筋肉が聖衣さながらに感光している。頭骸骨を撫でよ。机上の宇宙モデルの頭骸骨を撫でよ。それは古代のランプである。またそれは巨人伝説の魔法である。それから頭骸骨を展げよ。その中には記憶の寸断という美酒があふれている。前後不覚の電線の路地という路地にどろどろ腐蝕した蛸や蠅や燭台の足が吐かれる。美貌の少年たちの美貌の臍腑よ。おお紺碧の激痛が尻の根元から汚濁した七色のインク壺を噴出させる。熾天使の王たる電気回路を逆さまに果実を転がしている共有結合。巧妙な打楽器の激しい列車は真空管である。鏡板の迷しる涙が切妻敷桁を封じ込めてゆく。薄暗い教会堂を陶器でできた年代ものの北歐人形が訪れる。だがその老婆の胸に抱かれた枯れ花がみるみる値札を開いてゆく。頰裏な少女の黄ばんだドレスあるいは雨雲の襟巻きにパン屑や造花が弾丸を飛ばす。牡蠣は人面相をしてゴシックスタイルの官僚である。差掛け屋根の南方系樹木の果実は黄金のコンソールテーブルである。それらは第一夜の所業でありとりわけ第二夜には部屋に招かれた被害者と追跡者は疑不活性ガス構造をもっているであろうか。羽目板

には留め金と刃が番藏窓である 目撃者が解剖される密室の若主人の狡智にはマルタ十字が輝いている 二重の殺人事件は腕時計の鎖に入れ替わる ミイラは実は縫いぐるみのピーカーである 指の切れ端と腕の破片が外套の正体を十二時に射撃する おお帝王の偽装工作は完璧な首塊であり聖衣には紫水晶の占術が見破られている 律動する肉の衣裳のひと筋の紙片に入れ替わる有価証券 無水珪酸の丘陵の高熱太陽は長距離ランナーの全力疾走であろうか 緑色の半導体に強姦された公園は幼児性の退行であろうか だが集團トレーニングは順調なダイビングタックルの花冠のままである 樹令數千年の幻の光電管に自転車のお轍がくっきり残っている 永久硬水は浮遊している肉の規律とともに煙幕戦術である おお純粹事件よ ルーイスの創発的電信器よ 脚部が陰陽の致命的な運行のただなかで開いてゆく 天使の貌をした湯気 裸足が物置小舎の中に脱ぎ忘れられる その荒家は平行線の蔗糖蜜に不吉な矢印を添加する 失速する宇宙よ 銀河の断片よ 夜行列車の光芒に出現する楕円形の植物園のとりわけて第三夜 中央の通路で芝生が帯をつくっている その帯を解きながら集團行動の最後尾から順繰りに道を外れてゆく

少女たちの教室ではグロテスクな実験器材とともに回り道の分だけ乳房が蕃薇色である 駅の構内は終点の天国なのだろうか だが神経症の樹木の枝や根が雪の厚い接吻の地下からめらめら伸長しはじめると沼や池は呪文のうちに塞ざされてゆく 薄氷の岐れ道を辿る兄弟は落伍したままアブラハムの子であるダビデの子のように肥溜に漬かり込んでいる 二階家の一階は汎神論的な密偵である 熱湯は母と妹たちに向けて投擲される 空に架かる拋物状の金曜日地球の分身である 皆既蝕は電話麻の横行である 王侯貴族といえども結末には微粉末の華燭である 夢とは確執であらうか

楽 天 地

栄光は薄暗い小部屋の中で瞬いている はしゃいだ子供たちの頬に口づけよ 廻転木馬に跨りながら 河辺の遊園地はきらきら光る朝陽とともに健康である 妻の名を冠せられた橋を起点に禍いの橋や

粗忽長屋の棟を眺め静かな海に向かって冒険の道が伸びる。それは母への精一杯の婚約の挨拶である。その昔工場から直送された麦酒がほろ苦くドイツ風レストランで運葉な商売女と一緒によく泡に濡れたものだ。山師どもの跳梁した時代。恟哭すべき略奪の季節よ十九世紀の晨光の下で王の墓が開封される。爆竹が小うるさい銀蠟のように南風の中で鳴る。骨董品は蘇生し大理石の階段はゆらめく烟のように天空に紛れている。AIを染織した花が咲き乱れ子供たちの真紅の血潮が雪花石膏の部屋に溢れる。石版の昏がりて幻の水品球が素晴らしい色彩の光を放つ。半盲の詩人にとってそれは高貴なる廟である。老婆が聖刻文字で印刷された入場券を売り歩く。甘い歌声が聞こえる。誘惑するのは誰か。レースの緑飾りの付いた白無垢のドレスを纏う花嫁。あるいは祖なる四大から発せられた磁力なのであろうか。写真機のマグネシウム閃光のように早朝は寒冷の岸辺で頼んでいる。文明の類唐期が脳髓の洞から書物の源に采かる綺麗な印形を残す。波止場に色とりどりのヘリウム風船が舞い上がる。ミルク罐を抱えて駆け出す女の児。倉庫の重い扉や棧橋を舞台にしたギャングごっこ。ときたま酔っぱらいが恐怖の嗚咽をあげる。お

お亡霊のような櫓を傾けて船が出航する。腐液に充ちた海面は鷗たちの滑走路である。紙鉄砲を鳴らしていた少年の顔が蒼白の卵に委じつついてべりっと破られる。光を浴びた魔鏡ががらくたの中で死せる海を映す。精神病院とは楽しい鏡張りの迷路である。そしてダイヤモンドが金髪の乙女を閉じ込める。密室ほどの岩棚に匿されているのだらう。至る所で御婦人連中が震束の伝説に怯えている。切妻破風とは封印の一角を毀す不吉な呪咀である。屋敷は帆船に曳かれて花散る岩窟に塞ざされてしまう。船色の光芒を帯びた船は清涼な追風を受け何処へともなく流される。南極も夜。北極も夜。世界の透明な白夜。ジェット・コースターは銀色の車体を爆かせ遠い異国へと旅立っているのだらうか。王冠の飛沫をあげ真白な波のモザイクにみられる断裁。寺院を中心に放射状に拡がる町はいかなる栄光の星を抱いているのだらう。煮込みの美味さは下呂と唐辛子の比率に求められる。劇場や寄席を擁する天下一品のワンダー・ランドはいまや閑古鳥の楽園である。朝の氷の胸板で帝王切離の航路を往く船は悉く生気を吸われ青い暗礁に至ってどんな夢をみるのだらう。びっくり箱を覗いて子供たちの眼はガラス玉に変わる。正装の夫婦

がウエッカの脛を抜く 洋灯は蛇に転身する おお貞操の女神ディ
アーナよ 根太は航海術よりいっそう巧みに弛んだ腰を押し抜ける
舌が黄色の酸液に塗れてゆく 船室を結ぶ通路は甲板からはみでた
静脈の分岐である おお凍結の寸秒に酔う ナイルの鷹を肩に侍ら
せ少年たちは猛獣狩りに明け暮れる 塩と光との配合で建立された
門柱には青鬚の年代記が誌される (そんなものは一文の値打ちに
もならないのだよ) 旋回する塔の鎖をひきちぎって目を覚ました
少年はどこのだいつだ いっそ石棺の悪魔に喰われてしまえ 胃を
象った館は水質検査票とともに考古学者の手帳に封じられる 歴代
の領主よ その顧問官 料理人 玩具製造業者 そしてなによりも
不死の子宮よ 結託して婦女子の齢を数え上げるなどは失礼千万で
ある 目を閉じよ 耳を塞げ あらゆる汗腺を絞れ おお雲を掴む
がごとき眩暈のうちに織物が扮飾される 市民は誤植を愛す 焔の
ような記憶を抱いて失楽する 家具や調度品とりわけ焚香を眺め鳴
物入りで婚礼の祝に赴こう 白地に黒を塗たくる新聞のように し
かし一段と豪華である (赤い空に貼られた満月とそれを斜めに掠
める機械仕掛けの蝙蝠が翌朝には純白の空洞に転ずる ふふんこい

つは蝙蝠の尻を映す蝙蝠のもう一方の眼球に相違あるまい) 室内が縮む 花嫁の罪を喘ぎに歩調を合わせ 道化師が通行人の笑いを誘わうと子供たちの脳味噌をべちゃんこにする 飛白の浴衣で薔薇色の肌を包んだ小粋な姐さんが立ち止まりちらと流し目を呉れる 夕映えが看板や橋桁を染めてゆくと小児無料開放の祝日は永遠に失われる 添景には回転飛行機が眩しい 部屋が可憐に歪む 幻の聖霊受胎が夥しい 番犬はひと声吠えあげるとくるりと踵を返し後足で土塊を蹴って銅像のように殺風景な夜空に溶け込んでゆく 侵入者にとって事態はどのように作用するのだろうか 十九世紀の深更を告げるミサの鐘はブラネタリウムの天蓋を吊る紐とともにぶつりと断たれる 内部と外部との攪拌はもはや終了する 扉は漆喰に蔽われ館から逃れることは能わない 事態の侵入という転末よ 緑の膨張する球ともいふべき船は荒々しい手練手管を弄して全男性を勃起させる この詞とは何か アポロン神の栄光の漿液に充ちる暗黒宇宙の華英の如き部屋

貝殻伝説

ゆけども間断なく書物はめくれあがる タロットを用いて彼らを呼び出そう 光は失われているのだから 闇の彼方から地底の使者たちが黒い布にくるまって現われる 翼ある怪物に騎って紫の水流を渡るもの 心臓の形に切り取られた鳥瞰図を作成するもの 王蛇科に属するとぐる巻くものの飛行のような 華やかな光が点り次第に濃厚な色彩を映し出す 使い魔たちは三種の得物を携え僧服から頭文な貌を覗かせる だがこれらの舞台を領する幻覚は砂粒ほどの大いさである 脳髄剝離はこのときなされていたのであろうか 夜の充盈もしくは性器のようにべろりとした薔薇 楽園の惱ましい匂い 空想物語の奇怪な言葉は秘密の裡に次なるシレーヌを誕生させる 満天の星は薄汚れていた 左腕を折られた酔漢が地べたに伏していた 貧血の靱蔓の巨大な袋から夢の液が浸み出ている おおこの魔の薬草の素晴らしい効用とは 端正な口許から白い犬歯をみせて上等のマントを小気味よく翻えしながら一人の紳士が近づいてくる 納掛物の月が超大な棹を突き立てて祝福する 神降ろしの台座は太陽

を身籠っていた。そのあたりで羊水を貯えた鉢物が見出される。それから十と三つの断崖に括られた誘惑の墮天使が鳥肌を慄わせ想い出を託して細い声で唄う。のっぺりと白い渦が耳鳴りを伴って浮遊する。洞窟や耳朶さらに書物の花冠へと幻聴はどろりと紅潮した旗を振る。そうして下腹部に矢印の尻尾を生やした僧職が澄み切った星空に酒気を放ってゆくのである。険しい靈気が訪れる。呑屋で高尚な話をする奴なんて強っ八だ。およそ大唄をかくべきである。その昔天体配置図には目玉が挟られていた。図版には神々への傾斜と階段ピラミッドの比較が示されている。玲瓏な泉は飛蚊症に思かっている。星座を受胎した金属はその滑らかな水面から露出する。毛を帯びた風が飽和状態の樹々の夜を掠める。灼熱の責め苦に苛まれている亡霊の唄が草の根を分け寒冷の地表を渡ってゆく。十文字に隊伍を組み奥物状に瑤々しい翼を散らしてゆく白鳥。だがその鉄錠にも似た羽を貫き葬祭の塔は燦くオーロラを寸断しイム||ホテブの叡智のように気高い白夜に聳り立つ。おおなおも見上げると不凍港の明けゆく天の辺を銀色の蝶が這い廻っている。淡水の海で足首が泳いでいる。ブロック塀をぶち抜いて右拳は砕ける。有史以前の獣

を網羅したパピルスはあの洪水で紛失した 男とは器だ 女とは鏡である ああ空洞の楽天地の紡錘形の分裂直前の太陽の双生児の眼窩の子宮状の太古の花の糸滴から飛翔する星雲の楕円の航海図の秘蹟の出血よ とどのつまり睡された単調で急速な祈りの糸りにおける頭脳の反転 眼鏡が宙を舞う それから朝までの長い威嚇 視神経には封印がなされている 古代の人生観を語る猫目石 やわらかな伝説の奇石よ あの石猿は蝸牛に喰われていた 氷河期が文明を呑み込む オリハルコンは吸取紙であろうか 齧やかな食虫花の蕊こそその証換である 食欲とは精神の骸子投げである 棘皮を生贄にした個体伝承は続けられる 人体の並ぶ天末線に雲が湧き氣象台に次々と不吉な知らせが齎される 昆虫は繊細な翅を見込まれラジオの役目を果たす もんどりうった拍子に右肩が切断される 肝臓や舌などを切り裂き奥まった十二方形の十二室にそれぞれ備えられた鍋の中に十三番目に給仕される礼拝の煮汁が漬かっている 林檎とレモンや各種スパイスを盛り込んだソースに浸されているのは羊の肉である 聖餐の時刻が近づいている 廻廊に敷きつめられた天鵞絨の弾力層のうすびかり ロリエの香りが発している 子供たち

はおもちや箱の中で契っている 玩具とは水晶体を真似た呪具だ
おお沈静の中に硫黄の烟とともに鞏固な柵囲いを越えて忍び寄る悪
徳の影 善行に動む蛭が素早く察知して吸盤を開く 預言者は失神
する 不義密通は蒼白な聖体によって推奨される バターの脂がた
まらぬい そのとき暗がりから下唇をひきつらせた妖しい首が浮か
ぶ 神託が宣べられている おおそれは数千年の間狼馬術を囁まされ
蠟燭の巖に鎖で括られていた女の真紅の唇 大いなる交接の器具よ
なんと螺旋宇宙の榮光の襤褸の中は駝鳥の足指ほどのベニスであっ
た 木菟・鸚鵡・鳥・井守・黒揚羽の黒焼きの屍衣を纏った瀟洒な
舞踊 酒宴に酒がないというのはおかしな話だ 小憎らしいパーテ
ンよ 急いで美酒を誂えろ 禁断の鬼火飛び交り魔の洞で 醜の究
醉する沼沢に咲き毒茸と共生しているマンドラゴラが肴になろう
すると円錐形の建物の頂で半熟の文字卵がきらびやかな口腔を開け
る からから笑うその奥に鉛のように重い呼吸器が見える 漏砂の
ような愛 肥桶の底で踊る純朴な天使たち 胸を貫く却罰よ 柄に
糞皮を巻きつけた黄金の剣こそ切っ尖鋭く時を支える振子である
腐った海産物が黎明の食卓に盛られている 貝殻を盗んだ失竊者は

行き止まりの街路へと逃れてゆく。前途を妨げる五六人の若者を薙ぎ倒してはみたものの一本道で曲り角を間違える。正統な嫡子とは墓場への案内人だ。丘の公園から俯瞰する港は霧の中に封じられている。茸のように艶しい花弁から赤い毒液が流れるともう親密な明方である。そよそよと光が走る。鉢物の中を遊ぶ花。王冠を戴いた蛸鱗があぶくの裡に匿される。滴のように垂れ下がった単眼を嫌って巻貝は胎児を追放する。中央に三つの孔をもつ球が毛羽を戦がせ太陽へと向かう。平穏な日輪は痛細胞であった。神秘な微笑から洩れる鎖状球菌が健やかな朝を放擲する。錆びついた宝物庫に腸詰めがぶら下がり至る所の余白にはなにものかの血が供されている。奥付けに果喰う黄金虫よ。書物は何処に展げられているのだろう。失明を招ぶ薔薇鉄条の夜々。